史学雑誌．2011；57: 19–37
坂井建雄：18世紀以前ヨーロッパにおける医学実地書の系譜―起源から終焉まで．日本医史学雑誌．2015a；61: 235–253
坂井建雄：サレルノ医学校――その歴史とヨーロッパの医学教育における意義．日本医史学雑誌．2015b；61: 393–407
坂井建雄；澤井直：ゼンネルト（1572–1637）の生涯と業績．日本医史学雑誌．2013；59: 487–502
坂井建雄；澤井直：ブールハーフェ（1668～1738）の『医学教程』．日本医史学雑誌．2012；58: 357–372

同志社と看護教育
――そのバック・ボーン――

岡山　寧子

2015年4月，同志社女子大学看護学部が開設された．昨今の看護系学部の設置ラッシュを背景に「今なぜ看護学部なのか」「特色ある看護学教育とは」など，いかに新学部の特色を示していくかが問われるところである．同志社には，約130年前，その創立者・新島襄が日本で2番目に古い看護婦（現・看護師）養成機関である同志社病院・京都看病婦学校を開始した歴史がある．この新島の医療・看護への志，そして具体的にどのような看護教育を実践していたのか，これらが同志社らしい看護学教育のバック・ボーンであると考えている．ここでは，その一端を紹介する．

「真実ノ愛心ヲ以テ病人ノタメニスル人ガ入用デアル」

新島は，1864（元治元）年から約10年間欧米で学び，キリスト教の洗礼を受けて帰国した．1875（明治8）年に同志社英学校，翌年に同志社女学校を設立，学問の探求とともに，キリスト教主義に基づき，自治自立の精神を涵養し，国際感覚豊かな人物を育成することを教育の理念とした．また，1886（明治19）年京都看病婦学校・同志社病院での医療・看護教育を開始した．彼には医療人教育に対する深い志があり，学校設立に向けて「……病人ノ心ヲ思イヤリ真実ノ愛心ヲ以テ病人ノタメニスル人ガ入用デアル……」と述べている（1886（明治19）年大日本私立衛生会京都支会での演説草案より）．そして，設立の目的を第一に「病人ノ苦痛ヲ救フ……」，第二に「熟練ノ看病人ヲ養成スル……」，第三に「病人ノ心ヲ慰ムル事ガ甚大切……」の3つを挙げ，病人の気持ちに沿って，苦痛を和らげる看病法を学ぶこと，また「……看病婦ノ熟練シタルモノハ，医者ノ薬法ヨリモ大切ナル事……」と述べ，熟練した看護力と病人の心に寄り添える看護の重要性を示した．これは現代にも通じる看護職に求められる力，「看護実践能力」の育成をめざしていたのである．

ではなぜ，まだ近代看護が日本にほとんどなかった時代に新島はそのような現代にも通じる看護教育への志を培っていたのであろうか．まず，彼はキリスト教的な福祉観や隣人愛，あるいは他者のことを思う気持ちは，医療の分野で必ず発揮されるという考えに立っていたことが挙げられる．次に，新島にとって同志社英学校の大学昇格のために医学部創設の夢があったことや欧米での近代医療に直接触れていたこと，そして自身の幼少期からの度重なる病人としての体験などから医学校・病院・看護学校設立構想が培われ，こんな医療・看護を受けたい，そのためにどんな医療人教育すればよいのかという具体的なイメージが膨らんでいたのではないかと推測される．また，1872（明治5）年，彼は岩倉使節団の通訳として渡英した際に，近代看護発展の先駆者であるF. ナイチンゲールが看護教育を行っていた聖トマス病院を訪問しており，彼女の看護についても見聞きしていたと思われる．

新島の医療・看護への志の具現化：宣教看護婦 L. リチャーズ達の活躍

加えて，近代医療の先進国であったアメリカから宣教医 J. C. ベリー，宣教看護婦 L. リチャーズ達を病院・学校設立ブレインとして迎えたことが，新島の医療・看護への志の具現化に大きくつながったと考えられる．L. リチャーズはアメリカ最初に訓練を受けた看護婦であり，F. ナイチンゲールに直接指導を受けた後，実際にボストン市立病院看護学校での教育を実践し，実績を積んだ後に来日した．そのため，京都看病婦学校ではじめた看護教育システムや内容には，F. ナイチンゲールの考え方や彼女自身が経験してきたボストンでの看護教育を範とした，当時としては世界的にも最新の看護実践や教育を日本に直輸入していたことがうかがわれた．例えば，生徒の規律に「生徒はまじめ，正直，誠実，信頼に足る，時間を守る，落ち着いて従順，清潔できちんとしている，忍耐強く明るく親切でなければならない」（京都看病婦学校規則，1887年）と示しているが，それとほぼ同様の内容がボストン市立病院看護学校規則（1878年）あるいは救貧病院における看護（聖トマス病院での訓練，1867年）にも示されている．また，京都看病婦学校卒業生の多くに，日本や海外で幅広く活躍した足跡をみることができる．それらは，L. リチャーズ達による看護教育とその実践が，当時の日本だけでなく世界的にもレベルの高い，先進的で国際感覚豊かなものであったことを示していると考えられる．

京都看病婦学校は，新島亡き後，同志社の手を離れ，医師佐伯理一郎にその運営は委ねられ，第二次世界大戦後，看護の新制度に切り替わるまで続いた．キリスト教精神に基づいた佐伯の看護職育成への志は，米寿記念の碑に刻まれている「受くよりも与うるは福也」の聖句からも偲ばれる．このような新島や佐伯の看護職育成の志を引き継ぎ，そして当時導入された先進的な看護教育の原点をみつめながら，同志社らしい看護学教育を構築していきたい．

（平成27年12月六史学会合同例会）

佐賀薬種商野中家所蔵解剖書について

青木　歳幸

野中家は，寛永3年（1626）創業の代々製薬業を営んできて現代のウサイエン製薬株式会社まで，約400年の歴史を誇る老舗薬種商である．慶応3年（1867）のパリ万博にも参加するなど，佐賀藩の御用達商人としても活躍した．

同家は，江戸前期からの薬種商としての必要な医薬書が蓄積されて，『医学天正記』，『延寿撮要』，『東医宝鑑』のほか，明治期の『御殿診籍（天璋院篤姫診療記録）』などにいたる江戸前期から幕末・明治期にかけての漢方医薬書が多数所蔵している．さらに西洋医学の普及にともない，西洋外科書・翻訳書，洋文の原書も少なからず所蔵している．佐賀大学では，平成24年10月から，ご当主の了解を得て，野中家蔵書の整理にあたっており，本報告は，野中家所蔵の外科書のうち，解剖書の『蔵志』，『施薬院解体図』，『解臓図賦』，『解屍新編』，『解体新正図』の5点の紹介である．

1.『蔵志』（刊本）

京都の医師山脇東洋が，宝暦4年（1754）に，京都の六角獄舎で観臓を実施し，5年後の宝暦9年に『蔵志』を刊行したもので野中家にも所蔵されていた．以後，門人栗山孝庵が，萩で宝暦8年に男屍を，宝暦9年に女屍を解剖し，古河藩医河口信任は，京都で明和8年（1771）に男屍の頭部や眼球を含む解剖を実施し，翌明和9年に『解屍